

ジャパニーズ・イングリッシュにおける「日本らしさ」

－浜口恵俊の「間人主義」を応用して－

呉 尚峻

1. はじめに

World Englishes (WE) 研究の分野では、各地域の文化的な影響を反映した多様な英語バラエティーが注目されており、ジャパニーズ・イングリッシュ (Japanese English, JE) もその一例とされる。しかし、従来の JE 研究は音韻や文法といった言語的特徴に焦点を当てることが多く (e.g. Olah, 2007; D'Angelo, 2013, 2021)、JE が日本の文化的価値観をどのように反映しているかについては、いまだ十分に解明されていない。そこで、本研究は、日本の文化的価値観がどのように JE に表出しているのかを探究することを目的とする。

この研究課題に取り組むにあたり、本研究では、理論としては浜口恵俊の「間人主義」を用いる。間人主義は、日本の文化的価値観を「日本らしさ」と名付け、他者との関係性の中で自己を認識する価値観として捉えるものであり、「間」という概念に基づいている。この「間」は、個人が他者との関係性において自らの存在意義や価値を見出す文化的特質を表しており、日本人¹の対人関係や自己表現の根底にあるものである。本研究では、この「日本らしさ」を用いることで JE の言語実践にどのような「日本らしさ」を見出すことができるのかを検証する。

本研究の方法論としては、現象学的アプローチを採用し、日本の文脈で英語を用いる場面での言語実践を「生きられた経験」として記述する。具体的には、ビジネス的、日常的な状況において、日本人が英語をどのように使用し、その中で「日本らしさ」がどのように表現されているかを検証する。

2. ジャパニーズ・イングリッシュに関する先行研究

本節では、まず「世界英語」(World Englishes) という研究領域を紹介し、その後、JE に関する先行研究を音韻学的、文法的、語用論的な特徴に基づいて整理する。

WE とは世界中で話される英語の多様なバラエティーを体系的に研究する枠組みを指す。英語のグローバルな普及により、異なる文化的、言語的影響を受けた英語の出現を受け、その多様性を正当化するパラダイムとして Kachru (1985) によって提言されたものである。英語の多様なバラエティーは、それぞれの音韻学、語彙、統語、語用論、文化的パターンによって区別される。彼の提案す

¹ 「日本人」の定義には大きな複雑さが伴う。結論から言えば、本論文で扱う「日本人」は人種、国籍と関係なく、日本で生まれ育ち、日本語を第一言語とし、日本文化にどっぷり浸かりながら暮らしている人々とする。

る三つの集中円モデルによると、内円には英国、アメリカ合衆国、カナダ、アイルランド、オーストラリア、ニュージーランドなど、英語が第一言語または母語として使われる国々が含まれ、これらの国々はその文化的および言語的基盤によって英語モデルの規範を形成する。外円には、インド、パキスタン、フィリピン、マレーシア、シンガポールなど、英語が公用語として、または国内の主要なコミュニケーション言語として使用される国々が含まれる。これらの国々においては、植民地時代に導入された英語がその歴史的背景により、文法、語彙、発音などの側面で独自の特徴を持つ形に発展してきた。さらに、拡大円には、中国、日本、韓国、エジプト、インドネシアなど、英語が重要な外国語として位置づけられているが、その歴史的、制度的な重要性は低い国々が含まれる。これらの国々は英語を習得する際に内円英語の規範からの影響を受ける。WE が理論的に確立したことにより、ローカルな英語バラエティーの記述と分析 (Kachru, 1992) や言語イデオロギーと権力構造の批判的研究 (Pennycook, 1994) などのような研究が展開されるようになっていく。

次に JE に関連する研究の特徴を述べる。JE は日本の文脈を反映した独自の特性を備えているが、それが内円の基準からは「標準的でない」とされ、「欠陥」と見なされることも多い (Suenobu, 1999)。McVeigh (2002) や Schneider (2014) が指摘するように、日本は英語に対して一種の「興味」を持つが、それが必須の言語とはみなしていない。実際、英語は公用語として認められておらず、英語の使用は主に教育機関や一部の職場に限定され、日常的に英語を使用する機会は少ない。そこで、JE は「パフォーマンス・バラエティ」として、日本語の音韻や語彙、表現方法を色濃く反映し、内円 (アメリカ、イギリスなど) の標準的な英語とは異なる特性を持つ (Morrow, 2004) とされる。パフォーマンス・バラエティとは、社会的な認知や制度的な地位は持たないものの、特定の文化や場面において機能するバラエティを指し、主に教育的・場面的な必要性から用いられるものである。

これに対して、多くの研究が、JE の音韻学的、文法的、語用論的特徴を特定しており、「学習者のエラー」ではないことを示唆している。例えば、JE の音韻的特徴については、日本語は子音と母音の組み合わせを基本としているため、英語の連続する子音を正確に発音することは、日本人話者にとって一般的に困難であることが指摘されている。「bed」を「ベッド (beddo)」とカタカナ転写する場合や、「disk」、「task」、「ask」を「ディスク (disuku)」、「タスク (tasuku)」、「アスク (asuku)」と発音することは、この適応の典型的な例である (Kay, 1995; Takeshita, 2020)。このような現象を「音節拡張」と呼び、英語の単語が日本語の発音システムに適合するように変形される (Olah, 2007)。また、日本語には存在しない特定の英語の子音、例えば「th」が「s」や「z」に置き換えられる (Kay, 1995)、そして「f」や「v」の音がないために「film」が「フィルム (huilmu)」、「coffee house」が「コーヒーハウス (cohee housu)」、「vacation」が「バケーション (bacation)」と発音されることもある。また、D'Angelo et al. (2021) は Thompson (2001) の研究を引用し、日本人学習者が英語の母音、例えば /æ/ や /a/ を発音しようとする際、しばしばネイティブの /a/ 音に近づける傾向にあることを指摘している。

JE の文法的特徴も指摘されている。D'Angelo et al. (2021) の研究によると、日本語には過去形が存在するにも関わらず、日本人が英語を使う際には時制の使用に多様な傾向が見られる。一部のグループは母語で時制を省略することがあっても、英語では標準的な過去形の規則を厳格に守る。一方で、他のグループは過去の出来事を述べる際に現在形を用いることが多く、「The summer in Canada was not hot」を「Canada summer is not hot」と表現することがある。さらに、同一コンテクス

ト内で過去形と現在形を使い分けるグループもあり、時制の使用に一貫性がないことが示されている。また、JE における複数形の形成は、厳格な文法規則よりも可算性の概念に影響されている。具体的に数えることができる名詞には通常、「-s」接尾辞が追加されるが、具体性が低い可算アイテムや一般的な事物を指す場合には、複数形の接尾辞はよく省略される。たとえば、Yamaguchi (2018) によれば、彼の研究参加者が「マレーシア人」、「ショッピングモール」、「レストラン」などの一般的な概念について話した際、複数形を使用せず、これらの名詞を抽象的あるいは一般的な概念と見なしていたことが示されている。同様に、別の参加者は「event」を一般的な意味で使用し、複数形を用いなかった。JE での一般的な言及は、しばしば定冠詞を伴うことがあるが、参加者が自分の学生たちを含んだ具体的な実際のイベントについて話したとき、「students」を複数形で表現し、その具体性と数えられる特性を強調した。このように、JE では具体的と認識される名詞には「-s」接尾辞が一般的に付加されるが、抽象的または一般的な名詞にはこの接尾辞が省略されることが多い。

さらに、JE は、語用論的特徴によっても区別される。例えば、ネイティブの英語話者が「I saw many people at the park」と表現するのに対し、JE 話者はしばしば「There were many people at the park」と言う。これは、行為者よりも状況や場面を強調する日本人の傾向を反映し、日本語の文法構造を示している (D'Angelo et al. 2021)。さらに、JE は頻繁なバックチャネリングによっても特徴付けられている。こうした短い言葉やフレーズ、音声はアクティブリスニングを示している。White (1989) の研究によると、日本人話者は英語の会話において、アメリカ人話者よりも言語的および非言語的なバックチャンネルを多用する傾向があることが示されている。

以上の議論を踏まえると、これまでの JE 研究は、主に音韻的および文法的側面に焦点を当てており、文化的パターンという視点からの分析が十分なされていないと言える。たとえば、Yamaguchi (2018) は抽象的または一般的な名詞において複数形が省略される傾向について詳述しているが、こうした文法的現象が日本文化の価値観やアイデンティティとどのように関連しているのかについての検討されていない。同様に、D'Angelo et al. (2021) は JE の語用論的特徴を分析し、日本語の会話スタイルが JE に与える影響を指摘しているものの、その背景にある文化的価値観への踏み込みは見られない。

この問題の背景として、Suzuki (1978) が指摘するように、20 世紀前半のアメリカ言語学では科学的厳密性と行動主義的アプローチが重視された結果、言語に内包される文化的要素が「非言語的現象」とみなされ、言語学の中心的議論から排除されてきた経緯がある。文化は漠然として捉えにくい抽象的な領域とされ、客観的な検証に適さないと考えられていたため、研究対象から除外される傾向があった。これにより、言語と文化の相互作用を包括的に解明する機会が制限されてきた。

また、Everett (2009) は現代言語学がチョムスキー理論の影響を受けて発展してきたことを批判し、音韻や文法といった形式的側面への過度な集中が、言語を特定の文化的文脈の中で理解することを妨げていると述べている。彼は、言語は普遍的な文法規則の産物ではなく、人間の認知特性や文化的影響の結合によるものであり、その理解には文化的文脈を考慮することが不可欠であると主張している。

この観点に基づけば、JE 研究が文化的視点を欠いていることは、次のような理論的課題を引き起こしていると言える。まず、JE の音韻的・語用論的特徴が、単なる「言語転移」や「誤用」と解釈されるリスクを高め、その文化的独自性が正当に評価されないままとなっている。また、言語の表

層的特徴のみに焦点を当てることによって、JE が日本文化や社会的価値観とどのように結びついているのかという深層の理解が不足している。そこで本研究では、JE の言語実践を文化的パターンの視点から分析することを目的とする。次節では、JE の文化的パターンを新たに解釈し理解するため、日本の社会学者浜口恵俊が提案する間人主義の概念を用いることの妥当性について論じる。

3. 間人主義における「日本らしさ」

3.1 日本的視点の必要性

間人主義は日本の社会文化現象を説明するために、浜口恵俊が構築したエミクな概念である。彼は、日本社会の人間存在が西洋的な方法論的個人主義では説明できないことに着目し、「間（あいだ）」を中心とした理論を構築した。「関係性」を基盤とする視点を提唱し、人間形成の相互作用を分析する枠組みとして間人主義を生み出した。そこで、この間人主義をもちいることの妥当性を論じる前に、JE の文化的パターンを捉えるためにエミクな理論をもちいることの重要性について述べる。これまでの日本研究に対する批判として、分析がエティックな理論である西洋の理論に依拠していることが指摘されている（Sonoda, 1991; Sugimoto, 2014; 浜口, 1988）。浜口（1988）は、日本における国際的な研究者も国内研究者も、ヨーロッパやアメリカの社会状況を解釈するために構築された分析フレームワークを好む傾向があると指摘している。例えば、浜口は、ルース・ベネディクトによる著名な日本研究『菊と刀』について、ベネディクトの方法論が西洋の分析的パラダイムやカテゴリーに大きく依存していることを問題として指摘している。ベネディクトは日本を典型的な非西洋的「恥の文化」社会と位置づけ、不名誉を避けることが重要視される社会として提示した。しかし、彼女の分析アプローチは、個人を自由で自律的な存在と仮定する方法論的個人主義に基づいている。このモデルでは、罪悪感（または良心）の認識が自律的な個人の自我構造の中心に位置づけられる。一方で、恥は自律性を欠いた態度を表現する適切な概念として捉えられる。このような分析の結果、「恥の文化」社会として日本を特徴づけている。

方法論的個人主義については、国外だけではなく国内研究者によっても広く採用されていることが指摘されている（Hamaguchi, Kumon, and Creighton, 1985）。このアプローチは、個人を分析の基本単位とし、社会現象を個人の行動を分析することで説明できると仮定している。方法論的個人主義に依拠すると、集団主義はしばしば個人が固有のアイデンティティをより大きな集団に譲り渡し、その結果として個人の自由や自己が失われると解釈される。結果、方法論的個人主義のアプローチを採用することで、日本を「集団主義」社会として分類する傾向がある（e.g., Hofstede, 2005; Doi & Bester, 2014; Nakane, 2016）。

このように、エティックな理論をもちいることで、日本の社会ダイナミクスを完全には説明できず、多くの側面を探究しないままになったり、誤解を招いたりすることがある。その結果として、このようなアプローチはしばしば日本文化を単純化し、特に日本人論に見られるような文化本質主義的な見解を強化することにつながる（高野, 2008）。エミク視点は、日本の社会文化現象を深く理解するための方法であり、その文化内部からのみ知覚可能な独自の視点を提供する。この視点は、日本らしさを再発見し、外部の研究者やエティック視点では通常捉えることのできない深い洞察をもたらす（Hamaguchi, Kumon, & Creighton, 1985）。したがって、間人主義を通じて日本社会の現象をエミク視点から捉えることで、JE の中に表れる日本らしさをより深く理解することが可能となり、

本研究においてその適用が意義を持つと考えられる。

3.2 間人主義とは？

間人主義は人々の相互関係に重点を置き、それによって「自己」を見出す生き方を指す（浜口、1988）。「間人」という用語はこの理論を理解する上で中心的な役割を果たし、個々人の相互接続を強調し、自己認識が他者との関係に深く根ざしていることを示す。

すべての文化には、人間性に関する本質的な理解がある。これは、社会のメンバーがどのように個人的に共存するかについての明確な基準として機能する。一部の文化では、人間は根本的に独立した自律的な存在であるという強い信念がある。一方で、他の文化では、人々がコミュニティの一部として互いに依存することが自然な状態とされている。浜口（1988）によれば、日本人を含む東アジアの人々は、人々の関係性の中で個人を形成すると考える。このモデルでは、個人は生まれながらに決定されるのではなく、他者との相互作用と関係を通じて形成される。個人は、他者と共有する機能的な結びつきを認識し、これらの関係的な役割を統合して一貫したシステムを形成する。自己認識は、身近な人々との個人的な相互作用を通じて徐々に構築され、これらの相互作用から行動指針が生まれる。つまり、「自己」という概念は、自己内に固有の抽象的な実体を指すのではなく、他者との「人と人の間」の空間で継続的に適応し、獲得される現実を意味する。日本人は自己の基盤を内部に持つとは見なさず、誰が自分であり、誰が他者であるかは、彼らの間の人間関係によって決定される。個人がそのような特定される前に、人間関係が存在する。このような日本のパターンは、他者に基づいて参照点を設定し、関係性と相互依存性の性質を強調するタイプに属す。

このように、間人主義は、日本社会における人間関係の特質を深く反映しており、「日本らしさ」としての価値観をエミクな視点から再発見する枠組みとして意義を持つ。それは、「自己」という存在が孤立しているわけではなく、固有でもなく、関係によって形作られるダイナミックな存在である。

4. 研究手法

本節では、「日本らしさ」が日本の文脈における英語実践の中でどのように用いられているのかを検証するための手法として、現象学的アプローチを用いることの有効性について述べる。言語における文化の影響を示した代表的研究として、Daniel Everett (2009) の『ピダハン「言語本能」を超える文化と世界観』がある。Everett (2009) は、言語研究において文化的背景を考慮する重要性を指摘し、チョムスキーの普遍文法理論が文化を無視している点を批判している。彼は、ピダハン語の研究を通じて言語と文化の密接な結びつきを示し、言語を理解するためにはエスノグラフィ的アプローチが不可欠であると述べている。具体的には、研究者が対象文化に深く入り込み、日常生活の文脈で言語を捉える必要があると主張している。ピダハン語は、過去への言及を避けるなど独自の文法構造を持ち、これはその文化的価値観に深く根ざしているため、文化的文脈を無視しては言語の全体像を理解できないとされる。さらに、言語は独立した構造体ではなく、話者の世界観や生活様式と共生するものであり、文化と共に成り立つものとして捉えるべきであると指摘し、原文化の文脈に最も近い状況で言語を理解することの重要性を提唱している。そこで本研究では、日本人が英語を用いる場に身をおき、言語と文化の相互作用がどのような言語実践として立ち現れるかを現象学的に考察する。

「日本らしさ」は日常生活において前反省的 (pre-reflective) に深く根付いているため、現象学的アプローチをもちいることが適している。なぜなら現象学の目的は、前反省的な生きられた経験をテキストへと変換することにあるからだ。ヴァン・マーン (2016) によれば、現象学は人間科学の一分野であり、日常生活の体験の本質を捉えることを目指している。この方法論は、ドイツの「Geist」の概念に基づいており、人々の「意識」とその「行動」、「存在」とその「意味」を探究する。現象学の中心的な概念である「生きられた経験」とは、直接的で前反省的な生の意識を指すものである (村井, 2000)。それは、個人がどのように存在し、周囲と相互作用しているかという本質を捉え、人生における決定的かつ意味深い側面を示す。村井は次のように例えを用いて説明する。例えば、パネルディスカッションに登壇すると、注目を意識して普段の自然な振る舞いができなくなることがある。しかし、議論に没頭すればその意識は消え、活動に集中できる。この没頭の瞬間こそが「生きられた経験」である。

このような体験は時間を通じて構築され、後から振り返ることでその意味が明らかになる。私たちは「生きられた経験」を直接捉えることはできないが、それを振り返ることで意味を見出すことができる。本研究では、間人主義を通して「日本らしさ」を日本における英語活用から見出すためには、「生きられた経験」に注目することが必要である。

また、ヴァン・マーン (2016) は、現象学において研究者自身の生きられた経験が、普遍的な人間の真理を明らかにするためのデータとして扱われ得ると述べている。彼の主張によれば、個人的な体験は単なる私的な記憶や事実にとどまらず、それが反省的に記述されることで、他者にも共通する可能性のある普遍的な体験へと昇華される。こうしたアプローチは、個人の経験を単なる主観的なものとして片付けるのではなく、それを人間存在の根源的な問いに接続するための有効な出発点として捉える点にその独自性がある。

以上の議論に基づき、本研究では、筆者が京都での生活を通じて、日本人が英語を使う際の「日本らしさ」を現象学的アプローチで振り返る。まず、具体的な場面で「日本らしさ」を感じた瞬間や、英語を話している際に自然と出てくる日本的な表現や態度を詳細に記述する。例えば、アルバイトの場において、日本人が「お気を付けて」や「お疲れ様」といった表現を、英語でのコミュニケーションにおいても無意識に口にする状況を想起する。このとき、英語を通じてこれらの表現を伝えたいとする心理が働いていることをテキスト化するものである。次に、その経験の中から日本的な価値観がどのように表出しているかを探り、これを存在論的なテーマとして抽出する。英語の中にも自然と表れる「間」といった要素に注目し、これが間人主義的な本質であると捉えることで、日本らしさの本質的な意味を引き出していく。続いて、記述された経験と抽出したテーマに対して反省的に考察を行う。たとえば、「なぜ日本的な表現が英語の場面でも重要であると感じられるのか」「この意識が日本文化に根差していること」について問いかけ、内面的な価値観や感情を文章に反映させる。これにより、英語であっても日本らしさが自然に表れるという意識の深層が明らかになる。その後、得られた記述を解釈し、「この日本らしさの表出が他の人々にも共通し得るものか」「異文化間での日本的な価値観がどのように表れるか」という視点から考察する。他の非母語話者が自国の文化的価値観を英語に反映する場合と比較することで、「日本らしさ」より深く理解することができる。

最後に、これらのプロセスを通して得た洞察を研究全体に統合し、日本的な表現が英語によるコ

コミュニケーションの場合、どのように表れるのかを示す。これにより、日本の文化的価値観を表現する英語としてのJEを論じることとする。

5. 現象の中に生きる：自己表現としてのジャパニーズ・イングリッシュ

筆者は京都で留学生として生活する中で、日本人を含む英語での会話に耳を傾けたり、参加したりしている。これらの対話に深く没頭することで、日本人が英語を使用する際の特有のパターンに気づき始めた。この観察は私の好奇心を刺激し、なぜ日本人がこの特定の方法で英語を話すのかという疑問につながった。この疑問から、日本における英語習得の文化的基盤を探る旅が始まった。私が気づいたのは、一般市民から学者まで、英語の能力にかかわらず、多くの人々が特有の表現パターンを持っているということで、このような英語は「日本の価値を反映したJE」、すなわち「日本的な風味を持つ英語」として表現されることがある（Hino, 2021）。

私は京都駅で京都市バスのコンシェルジュとしてアルバイトをしていた。京都市バス「おもてなしコンシェルジュ」は、「市民のみならず国内外から京都を訪れる多くの観光客のみならず、市バスを快適にご利用いただくため、“おもてなし”の心に溢れたお客様サービスを提供する」仕事である（コンシェルジュって？, n.d.）。同僚たちは英語を流暢に話し、効果的にコミュニケーションを取ることができた。私たちは、ゲストにルートガイダンスを提供する際、ただの「ホスピタリティ」以上の「おもてなし」を実践する必要があった。そこでは「おもてなし」とは、相手のニーズを彼らが言う前に感じ取る直感的な理解と、利己的でない奉仕の精神を含むものだとして認識されていた。この文脈で、英語を話すゲストとの交流において、同僚たちはゲストのニーズを暗黙に考慮し、「お気をつけていってらっしゃいませ」という敬語を用いることが一般的だった。一方、ニュージーランドで生活し英語でコミュニケーションをとることに慣れている私は、「Have a nice day」という典型的な英語の表現を好んで使用していた。

この現象は複数の観点から解釈可能である。まず、同僚の言語能力について考えてみる。彼らの英語スキルが「おもてなし」のニュアンスを完全に捉える英語表現を見つけるには不十分である可能性がある。特に、このアルバイトでは英語能力が必須ではないため、これは一つの可能な解釈と考えられる。しかし、海外で教育を受けた高度な英語能力を持つ同僚でさえ、典型的な英語の反応を避け日本語のフレーズを選んでいたので、この説明だけでは不十分である。次に、この習慣が会社の指針に従う結果であり、日本語を使って「おもてなし」の精神を保つことを重視していると考えられる。しかしこの説明は一貫性が欠ける。英語でのルートガイダンスを通じて「おもてなし」の精神が維持されている場合、サービスの最後に日本語に突然切り替えることは筋が通らない。さらに、別れの挨拶で他の言語の使用が制限されている場合、なぜ私が英語を使うことは許されるのか？この例外は規則に反しており、言語選択の背後にある真の理由についてさらなる疑問を呼び起こす。また、同僚が英語で「おもてなし」の深いニュアンスと精神を表現することの限界を認識しており、意図的に英語での案内後に日本語に切り替えていた、と解釈することもできる。このような現象は私の体験に限らず、日本のサービス業全体で頻繁に見られる。英語でのコミュニケーションが可能であるにもかかわらず、特定のサービスの瞬間に敬語の日本語フレーズを選ぶウェ이터をよく見かける。例として、来店した客に「いらっしゃいませ」と言って迎え入れたり、準備時間が短かったにもかかわらず「お待たせしました」という表現を料理を提供する際に使用する

ことがある。

「おもてなし」が必要とされない状況についてはどうか？日本語のフレーズを使用するこの現象は、サービス業界にとどまらず、日常的な交流でも観察される。例えば、私が何度も経験したことがある、日本人と国際的な背景を持つ大学生たちが集まるカジュアルな集まりがある。鴨川の河川敷で、彼らがくつろぎながら会話を楽しみ、経験を共有し、文化を交換しているとき、彼らの交流方法には微妙に日本らしさが影響を与えていることが感じられる。集まりが終わりに近づくと、グループの日本人学生は単に「またね」と言う代わりに、「お疲れ様」と言って別れの挨拶をする。この表現の選択は注目に値するが、その理由是多層的である。日本人学生が「お疲れ様」という言葉を使うのは、それが日本文化の様々な文脈で労をねぎらう一般的な方法であるため、単なる習慣からかもしれない。また、それは日本の文化的パターンを反映した自動的な反応である可能性がある。さらに、日本人学生は、一緒に時間を過ごしている国際的な友人が日本語を理解していると思ひ込むかもしれない。そのため、彼らは日本語を使うことが自然だと感じるかもしれない。また、国際学生が日本語に堪能でなくても、その使用状況（共有した経験の終わりに、日本人学生が去るとき）がその意味を明確にするかもしれない。この日本語で表現する行為は、日本に馴染みのない人たちを文化的実践に参加させるように招待する、包括的なものと見なすことができる。最後に、「お疲れ様」というフレーズは、社交や一緒に過ごす時間であっても、その活動に投じた労力や苦労を認めるために日本でよく使われる。それは単なる別れの挨拶以上の、敬意を表する深い意味を加えるものである。日本人学生は、国際的な友人たちが正確に言語を理解しているかどうかにかかわらず、共有した経験にもっと深く響く感情を伝えようとしているのかもしれない。

英語を流暢に話す日本人が、特定の日本語の用語やフレーズを使う選択は、言語の好みを超えたものである。これは言語と文化の相互作用を示し、翻訳を通じてでも正確に伝えることが難しい価値観や文化的ニュアンスを体現している。日本人が英語を使いながらなぜ特定の日本語表現を選ぶのかというと、それは英語では表現しにくい「日本らしさ」の深く根付いた側面があるからである。このような現象は、日本語話者が彼らのコミュニケーションに日本らしさを適用する傾向があることを示し、言語が文化の本質を保存し反映していることを示している。これは言葉の単なる使用を超え、人間関係の相互依存性を表現している。

結論として、英語を流暢に話す日本人が英語コミュニケーションにおいても日本語のフレーズを使用することは、より深い文化現象を反映している。これは特定の文化的価値観やニュアンスを英語では完全に表現できないための意識的な選択である。この習慣は、言語使用における文化的な背景を認識し尊重することの重要性を強調し、言語と文化の複雑な関係を浮き彫りにしている。

6. 間人主義から見たジャパニーズ・イングリッシュ

前節で述べたように、日本人が英語でコミュニケーションする際、日本独特の概念を英語に訳さずそのまま使用する現象を現象学的に振り返った。この現象は、JE が日本的価値観や文化を反映するプロセスの一端であり、言語的「日本らしさ」をどのように表現するかを理解する上で重要である。特定の文化的な表現が英語化されずにそのまま使用されることは、JE の独自性を示す重要な特徴と考えられる。

間人主義の観点から日本人の社会的行動に目を向けると、浜口恵俊は「アウトサイドイン」とい

うアプローチを提唱している（1988）。このアプローチは、環境や周囲の人々に基づいて行動を調整するものであり、日本社会における相互依存の特徴を如実に示している。対照的に、ヨーロッパやアメリカでは「インサイドアウト」と呼ばれる個人中心の視点が社会的行動の基盤となる。個人の内面から出発して行動を決定する西洋のアプローチに対し、日本では他者や環境との調和を重視し、行動が他者の期待や状況に合わせて柔軟に調整される。これは、相手の視点に共感し、理解する能力を基盤としており、日本独特の概念である「おもてなし」にも深く結びついている。

「おもてなし」は、表明されたニーズに応えるだけでなく、それらを積極的に予測する行動を含む。この予測には、周囲の状況や人々の言語的・非言語的な手がかりを敏感に読み取る能力が求められる。このような鋭敏な感受性は、間人主義的な「アウトサイドイン」のアプローチに基づいており、人と人との関係が個々の行動を形作るという特徴を持つ。例えば、京都市バスの「おもてなしコンシェルジュ」においては、ゲストのニーズを言語化される前に察知し、安全や快適さを保証する行為が求められる。こうした行動は、相手との間で調和を形成し、社会的なつながりを強化するものである。

一方で、筆者が「Have a nice day」を好んで使用する背景には、英語圏での生活経験が影響している。「Have a nice day」は、英語圏で広く使用されるカジュアルな挨拶であり、特定の関係性を前提とせず、普遍的なメッセージとしてポジティブな印象を与えることを目的としている。この定型性は、間人主義的な文脈における「相手に合わせた柔軟な対応」とは異なり、誰に対しても同じ表現を用いる効率的なコミュニケーションスタイルを重視していると言える。

なお、「Have a nice day」と「お気をつけて行ってらっしゃいませ」の両方が、それぞれの文化圏において一般的な定型フレーズであることは否定できない。しかし、「お気をつけて行ってらっしゃいませ」は、相手の安全や気遣いを願う「おもてなし」の精神を伴っており、単なる形式的な挨拶を超えた役割を果たしている。この表現は、ゲストとの関係性の中で「相手を気遣う姿勢」を示す手段として機能し、間人主義的な文脈において「間」を形成する重要な要素である。このように、日本らしい表現は、相互性を強調し、人間関係を円滑にする役割を担っていると言える。

さらに、間人主義の枠組みを用い、JE 研究が欠いている文化的視点を補完すること、日本らしさを反映する表現として再評価される可能性がある。たとえば、英語においては「I」という単語の顕著な使用が、文化の個人主義に重点を置くことを象徴している。特に「I think」や「I believe」といった表現で始まり、個人の意見や立場を強調する。このように断定的に「I」を使用することは、個人の自律性と自己表現の西洋的倫理を凝縮している。

一方、日本語における「私」は間人主義の観点からより適切に理解されるかもしれない。間人主義は個人の相互接続と関係の重要性を強調する。日本語では、この相互接続は話者が自分自身をどのように参照するかによって明らかになる。さまざまな状況で話者が自分を指す方法は、そのアイデンティティ、聞き手との関係、そして対話される間人について様々なニュアンスを示す。たとえば、「私」は一般的な状況で使用され、性別や年齢を特定せず、中立的でさまざまな間人に適応可能である。「僕」や「俺」は、リスナーとの関係が尊敬、友情、または支配を含むかどうかについての情報を提供し、また話者の性別についても情報を提供する。さらに、歴史的に「朕」は皇帝によって自己を指すために使用され、個々のアイデンティティだけでなく、社会的および宇宙的秩序における皇帝の独特の位置を象徴している（Makino & Tsutsui, 1986）。

これらの例から、日本語の「私」は話者とリスナーおよびより広い社会的文脈との関係を示すマーカーとして機能する。私が先生であることは運命の設計によるものではなく、知識を求める生徒が私の言葉を待っているからである。「I」という概念は、家族、貴重な友人、そして知られている心と知られていない心の記憶によって形成される。「I」という概念は、関係的な間人が存在するときのみ根拠を持つ。

このように、自己存在に対する関係的アプローチは、日本語と文化に深く根ざしており、間人主義の影響を明確に示している。日本人が英語を話す際にも、このアプローチは継承され、彼らはしばしば関係性を優先して紹介する。たとえば、前述したトピックコメント構造では、背景設定やトピック（間人）が導入された後に、主題と述語間の多様な接続が可能となる。この主題の機能は通常、文の「トピック」として機能し、述語はそれに対する「コメント」を提供する。例えば、「今日は忙しい（Today is busy）」という表現では、「今日」という設定、つまり「忙しい今日」が強調される。また、前章に述べた JE の話者が「There were many people at the park」と言う場合、まず強調されるのは「公園」という場面も、トピックや文脈としての公園が前面に出され、その設定内で後続の情報が展開される。この構造は、日本語のトピック-コメント構造を反映しており、間人主義の影響のもと、個人の主体よりも文脈が優先されるものである。この設定がトピックまたは間人として前面に置かれ、その文脈で後続の情報が展開される。これは、日本語のトピックコメント構造に影響を受けたものであり、個々のエージェントよりも関係性を優先する間人主義の一例である。これに対し、標準的な英語ではしばしば主体やエージェントが優先され、「I am busy today」、「I saw many people at the park」という形で個人主義的またはエージェント主導のアプローチが反映される。

日本人英語話者の頻繁なバックチャネリングも、話し手と聞き手の間の共生的な関係を強調する文化的枠組みに根差している。日本人は「はい」という言葉を用いて、話し手に「聞いている」「あなたの発する信号を受け取っている」と伝える（Galtung & Nishimura, 1983; Allen, 2019）。英語を話す際も、日本人話者はこの習慣を継承し、対人コミュニケーションスタイルの重要性を強調する。JE の聞き手が頻繁にうなずきや短い肯定的な応答を用いる場合、それは単に話についていくだけでなく、より深い意味を持つことがある。各うなずきや「うんうん」、「ああ」という反応は、「ここにいる、あなたと一緒にである、そしてあなたの言うことを大切にしている」と繰り返しているかのようである。これは関係を維持し、円滑な会話を促進するためである。また、リスナーがこれらの肯定的な応答をやめると、日本語話者は通常話を止めるのに対し、アメリカ人やオーストラリア人は話を続ける傾向がある。このような文化的な違いは、JE における対人コミュニケーションスタイルにも反映されている。したがって、JE における頻繁なバックチャネリングは、スムーズなコミュニケーションを促進すると同時に、相手との関係を確認する重要な役割を果たしているのである。

さらに、バックチャネリングが話者と聞き手の積極的な関与や理解を示すように、「受動態 (passive voice)」の好みも、間の関係を優先し、個人主義を控えめに表現する繊細なアプローチを提供するものである（Kashima & Kashima, 1998）。例えば、「It has been decided that the meeting will be postponed（会議は延期されることに決まりました）」という受動態の表現を用いることで、決定を下した主体から決定そのものへと焦点が移る。「I have decided...（私が決めた）」や「We have decided...（私たちが決めた）」といった主体を明示する表現ではなく、「It has been decided...」とすることで、行為（会議が延期されること）に重点を置き、行為者（決定者）は目立たなくなる。これは相手への敬意を示し、

関係性を重視する表現である (Ide, 1989)。

いわゆる標準英語においては、「We decide on the plan (私たちは計画を決める)」のように行為の主体を中心に据えた明快な物語構造をとることが一般的である。しかし、JE においては受動態が好まれ、この物語の焦点が変わる。「The plan was decided on (計画が決定された)」という表現は、決定者の主体性を後に退かせ、計画という結果そのものを物語の中心に置くものである。このような焦点の移動は、日本のコミュニケーションスタイルに見られる文化的特徴を反映しており、個人よりも文脈や状況を重視する傾向を示している。ゆえに、「JE」における受動態の好みは「日本らしさ」の表れであると捉えることができる。

JE がその「日本らしさ」を通じて間人主義の影響をどのように受けているかについては、まだ探究すべき多くの点がある。JE の語用論的特性は、単なる言語的特徴を超えたものである。それらは、相互人間関係の複雑なネットワークに重きを置く日本の哲学、すなわち「日本らしさ」の具体的な表現である。この視点は、自己存在に対する代替的な理解を提供し、間人主義の中核的な原則として機能する。グローバルな英語研究において哲学的アプローチを取り入れることは極めて重要であり、それによってクロスカルチャルな研究とコミュニケーションを促進し、英語のバリエーションにおける隠れたパターンを明らかにすることができる。

7. おわりに

本研究では、間人主義を理論的枠組みとして用い、ジャパニーズ・イングリッシュの中に表れる「日本らしさ」を明らかにした。従来の JE 研究が音韻や文法などの言語的特徴に焦点を当ててきたのに対し、本研究は、JE が単なる英語バリエーションではなく、関係性を重視する日本文化の価値観と世界観を反映した表現であることを示している。この視点は、JE が内包する文化的要素をより正確に理解するための新たな方向性を提供するものである。

間人主義の枠組みを通じて、JE におけるバックチャネリングや受動態の使用といった語用論的特徴が、個人主義よりも関係性を重視する日本文化の影響を反映していることを具体的に示した。また、現象学的アプローチに基づき、日常の生きられた経験を通じて表現される「日本らしさ」を記述し、言語的表層の特徴を超えた深層的な文化的価値を探究した。この手法によって、JE が単なる「英語を話す日本人」の言語的産物にとどまらず、文化的・存在論的に日本的な自己表現として機能していることを明らかにした。

JE は、日本人英語話者が英語を使う際に、自己の文化的アイデンティティを妥協することなく保持し、表現するための重要な手段である。本研究の成果は、日本文化がいかんして言語を通じて発信され、グローバルな文脈で新たな価値を創出し得るかを具体的に示している。このような分析は、JE をただのローカルな英語変種としてではなく、文化的独自性を備えた重要なコミュニケーション手段として認識することの必要性を強調している。

しかしながら、本研究にはいくつかの限界が存在する。本研究は主に語用論的特徴に焦点を当てており、JE における音韻的・統語的特徴と文化的パターンとの関連については十分に検討されていない。これらの側面を統合的に分析することで、より包括的な理解が得られる可能性がある。また、異なる社会的背景、例えば学術的な文脈における JE の使用に関する詳細な分析は十分に行われておらず、さらなる研究が求められる。

今後の研究では、より広範なインタビューや観察を通じて、異なる社会階層や地域の話者がどのように JE を用いているかを詳細に検討することが必要である。また、音韻的および統語的特徴がどのように「日本らしさ」を反映しているかを明らかにし、文化的価値観との関連性を深掘りすることが求められる。他の非母語話者が自身の文化的価値観を英語に反映させる方法と JE を比較することで、JE の特性をより明確にすることが期待される。さらに、JE を活用した英語教育の可能性を探り、学習者が自国の文化的価値観を保持しながら英語を学べるような指導法の開発を目指すことも重要である。

これらの方向性を追求することで、JE が日本文化を反映した英語のパラエティーとしてどのように機能しているかをより深く理解できると同時に、英語教育や国際コミュニケーションにおける実践的な意義も高めることが期待される。

参考文献

- Alatas, S. F. (2003). Academic Dependency and the Global Division of Labour in the Social Sciences. *Current Sociology*, 51(6), 599–613. <https://doi.org/10.1177/00113921030516003>
- Allen, T. J. (2019). “It has the ability to make the other person feel comfortable”: L1 Japanese speakers’ folk descriptions of aizuchi. *Lingua*, 230, 1027–1037. <https://doi.org/10.1016/j.lingua.2019.102737>
- D’Angelo, J., Yamaguchi, T., & Fujiwara, Y. (2021). Features of Japanese English. In *English in East and South Asia*, 122–136. <https://doi.org/10.4324/9780429433467-11>
- Doi, T., & Bester, J. (2014). *The anatomy of dependence: The key analysis of Japanese behavior*. Kodansha USA.
- Everett, D. L. (2009). *Don’t sleep: Life and language in the Amazonian jungle*. Vintage Books USA.
- Galtung, J., & Nishimura, F. (1983). Structure, culture and languages: An essay comparing the Indo-European, Chinese and Japanese languages. *Social Science Information*, 22(6), 895–925. <https://doi.org/10.1177/053901883022006004>
- Hamaguchi, E., Kumon, S., & Creighton, M. R. (1985). A contextual model of the Japanese: Toward a methodological innovation in Japan studies. *The Journal of Japanese Studies*, 11(2), 289–321. <https://doi.org/10.2307/132562>
- Hino, N. (2021). Japanese English as an expanding circle variety: Viewpoints and approaches. *Asian Englishes*, 23(1), 3–14. <https://doi.org/10.1080/13488678.2020.1858582>
- Hofstede, G. (2005). *Culture’s consequences: International differences in work-related values*. Sage.
- Hunt, J. R. (2020). *English in Japan: From foreign to international language*. *Journal of Regional Development Studies*, 57, 1–66.
- Ide, S. (1989). Formal forms and discernment: Two neglected aspects of universals of linguistic politeness. *Mult*, 8(2–3), 223–248. <https://doi.org/10.1515/mult.1989.8.2-3.223>
- Ikegashira, A., Matsumoto, Y., & Morita, Y. (2009). English education in Japan: From kindergarten to university. In *Into the next decade with (2nd) FL teaching*, 16–40. <http://web.iec.ehime-u.ac.jp/reinelt/raineruto1/02RD2.pdf>
- Kachru, B. B. (1983). Introduction: The other side of English. In B. B. Kachru (Ed.), *The other tongue: English across cultures* (1st ed.), 1–12. Oxford, England: Pergamon Press.
- Kachru, B. (1985). Standards, codification and sociolinguistic realism: The English language in the outer circle. In R. Quirk & H. G. Widdowson (Eds.), *English in the world: Teaching and learning the language and literatures*, 11–30. Cambridge University Press.
- Kachru, B. B. (1992). *The Other Tongue: English Across Cultures*. University of Illinois Press.
- Kashima, E. S., & Kashima, Y. (1998). Culture and language: The case of cultural dimensions and personal pronoun use. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 29(3), 461–486.

- <https://doi.org/10.1177/0022022198293005>
- Kay, G. (1995). English loanwords in Japanese. *World Englishes*, 14(1), 67–76.
<https://doi.org/10.1111/j.1467-971x.1995.tb00340.x>
- Makino, S., & Tsutsui, M. (1986). *A dictionary of basic Japanese grammar*. Japan Times.
- Morishita, S. (2021). What is Omotenashi? A comparative analysis with service and hospitality in the Japanese lodging industry. *Journal of Advanced Management Science*, 88–95.
<https://doi.org/10.18178/joams.9.4.88-95>
- McVeigh, B. J. (2002). *Japanese Higher Education as Myth*. M. E. Sharpe.
- Morrow, P. R. (2004). English in Japan: The World Englishes Perspective. *JALT Journal*, 26(1).
- Nakane, C. (2016). *Japanese society*. Weidenfeld & Nicolson.
- Olah, B. (2007). English loanwords in Japanese: Effects, attitudes and usage as a means of improving spoken English ability. *Bunkyo Gakuin Daigaku Ningen Gakubu Kenkyū Kiyo*, 9(1), 177–188.
https://www.bgu.ac.jp/library/wp-content/uploads/sites/11/2022/08/kyukiyo9_177-188.pdf
- Pennycook, A. (1994). *The Cultural Politics of English as an International Language*. Longman.
- Schneider, E. W. (2014). New reflections on the evolutionary dynamics of world Englishes. *World Englishes*, 33(1), 9–32.
- Smith, L. T. (2012). *Decolonizing methodologies* (2nd ed.). Zed Books.
- Sonoda, H. (1991). 逆欠如理論 [Reverse Deficiency Theory]. *The Journal of Educational Sociology*, 49, 9–33.
- SuenObu, M. (1999). *Japanese English*. The Institute of Economic Research, Kobe University of Commerce.
- Sugimoto, Y. (2014). ‘Japanese society: Inside Out and Outside in’, *International Sociology*, 29(3), 191–208.
doi:10.1177/0268580914530416.
- Suzuki, T. (1978). *Words in context: A Japanese perspective on language and culture* (A. Miura, Trans.). Kodansha International Ltd.
- Suzuki, T. (1979, June 24). Native speakers don’t own English language. *The Japan Times*.
- Takeshita, Y. (2020). English in Japan. In *The Routledge Handbook of World Englishes* (2nd ed.), 319–337. essay, Routledge.
- Thompson, I. (2001). Japanese speakers. In M. Swan & B. Smith (Eds.), *Learner English: A teacher’s guide to interference and other problems* (2nd ed.), 296–306. Cambridge University Press.
- White, S. (1989). Backchannels across cultures: A study of Americans and Japanese. *Language in Society*, 18(1), 59–76. <https://doi.org/10.1017/S0047404500013270>
- Van Manen, M. (2016). *Researching lived experience: Human science an action sensitive pedagogy*. London: Routledge.
- Yamaguchi, T. (2018). Lexicogrammatical features in Japanese English: A study of five speakers. *Research in Language*, 16(3), 341–355. <https://doi.org/10.2478/rela-2018-0017>
- コンシェルジュって？. (n. d.). コンシェルジュって？. Retrieved July 25, 2023, from
<https://www.omotenashi-con.net/%E3%82%B3%E3%83%B3%E3%82%B7%E3%82%A7%E3%83%AB%E3%82%B8%E3%83%A5%E3%81%A3%E3%81%A6/>
- 浜口恵俊 (1988) 「日本らしさ」の再発見, 講談社, 東京.
- 村井尚子 (2000). ヴァン＝マーンンにおける「生きられた経験」の現象学的探究. 京都大学大学院教養学研究科紀要, 第 46 号, 348–360.
- 高野陽太郎 (2008). 「集団主義」という錯覚—日本人論の思い違いとその由来, 新曜社, 東京.

(高等教育学コース 博士後期課程 1 回生)

(受稿 2024 年 8 月 31 日、改稿 2025 年 1 月 6 日、受理 2025 年 1 月 8 日)

ジャパニーズ・イングリッシュにおける「日本らしさ」

—浜口恵俊の「間人主義」を応用して—

呉 尚峻

本研究は、ジャパニーズ・イングリッシュ (JE) を対象とし、日本文化の価値観や特徴が JE にどのように反映されているかを探究するものである。従来の研究が音韻や文法的特徴に焦点を当ててきたのに対し、本研究では浜口恵俊の「間人主義」を理論的枠組みとして用い、JE における「日本らしさ」の表現を分析する。「間人主義」は、他者との関係性の中で自己を認識するという日本独自の価値観を示す理論であり、JE にもこの関係性重視の文化的特徴が表れていると論じる。さらに、現象学的アプローチを採用し、日常生活やビジネスの場面での JE 使用を「生きられた経験」として記述し、その文化的背景を明らかにする。JE の語用論的特徴や受動態の使用、バックチャネリングなどが、日本文化に根差した独自性を持つことを示し、JE が単なるローカルな英語変種ではなく、文化的アイデンティティを保持し表現する手段であることを提唱する。

The Japaneseness of Japanese English: Considering Hamaguchi Esyun's Contextualism

WU Shangjun

This study was performed to examine Japanese English (JE) as a linguistic variety reflecting Japanese cultural values and practices. While previous research has focused primarily on phonological and grammatical aspects of JE, this study adopted Esyun Hamaguchi's Contextualism as a theoretical framework to explore the manifestation of "Japaneseness" in JE. Contextualism emphasizes the relational nature of self-concept in Japanese culture, where individuals define themselves through interpersonal relationships. Using a phenomenological approach, the study investigated how JE embodies Japanese cultural characteristics in everyday and professional contexts as "lived experiences." Key features of JE, such as pragmatic discourse, frequent back-channeling, and the use of the passive voice, are analyzed as expressions of cultural specificity. It is argued that JE is not merely a local English variety but a medium for preserving and expressing Japanese cultural identity in global communication. By foregrounding cultural dimensions of JE, this research contributes to a deeper understanding of the intersection between language and cultural identity, challenging dominant Western paradigms in linguistic studies.

キーワード : 世界英語、国際英語、ジャパニーズ・イングリッシュ、日本らしさ、間人主義、浜口恵俊、現象学

Keywords: World Englishes, Global Englishes, Japanese English, Japaneseness, Contextualism, Esyun Hamaguchi, Phenomenology